

スの場合、彼は聖書を熱心に読み、あらゆるキリスト教の書物を熱心に研究し、修辭学を教えていた。二番目の二人の行政監察官の場合、二人はたまたまアントニウスの生涯について記した書物を目にして、それを読み、感激して「突然」回心した。（このふたりのケースはアウグスティヌスとアリピウスの場合とよく似ている）その後アウグスティヌスは7章からポンチキアヌスの話を聞いてから自分がどういう精神状態になったかを書いて、内面の葛藤の末、回心したことを述べる。読者はミラノの回心とその前に語られた二つの回心を知った上でそれらの累積的な結果をふまえてアウグスティヌスの回心を読まねばならない。読者だけでなく、それらの回心を報告している語り手、シンプリキアヌス、ポンチキアヌス、アウグスティヌス（この最後の場合だけ、報告者がアウグスティヌスで、その証人がアリピウス）が段階的により外的な証人からより内的な証人へと変わっていることに注意しなければならない。アウグスティヌスは文体のレベルから聴衆（読者）の問題へと関心を変えることによって後期古代の物語りの手法を変革したと著者は歴史的な評価を下している。

---

Werner Beierwaltes:  
*Eriugena. Grundzüge seines Denkens.*

Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1994. 364 S.

今 義 博

本書はエリウゲナ思想に内在する思惟の原動力の基本的諸特徴を鋭く摘出し、その諸特徴の源泉史と影響史の射程を発見的に見渡しつつ、彼の独創的な思想の中に哲学にとって本質的な含蓄豊かな数々の思想財を発掘している。すなわち、一方ではエリウゲナの哲学の諸相を哲学史に位置づけ、他方では中世から、現代に至る神学、哲学、文学の諸局面がエリウゲナの拓いた地平の上にどのような連関をもって立っているかを示しつつ、彼の哲学の根本志向を洞察し、「力強く深い独創的精神」(F. Coplston)の動態を描写し、「壮大な形而上学的叙事詩」(E. Gilson)の体系と論理を浮き彫りにし、思惟の神秘の源に肉薄している。これほど深くかつ明解にエリウゲナ思想の構造と歴史的意義を浮き彫りにした研究はなかった。

本書の価値はしかしそれにとどまるものではない。エリウゲナの思惟の事柄そのものを思索することにより、彼の歴史上の思惟の現在化の可能性にこれほど強い光を当てたものはなかった。著者 W. Beierwaltes はエリウゲナの思惟の歴史的制約を明確に意識しつつも、「エリウゲナの哲学的神学は、我々が、変化した状況からではあるが、今日もなお『哲学すること』に期待しているものの基本的意図を完全に実現している」として、エリウゲナの思惟の事柄を現今の我々自身の思惟の事柄として思惟することが可能であることを本書を以て示している。それゆえ、本書はエリウゲナ哲学の歴史的・構造的の研究の書であると同時に、哲学的思惟の遂行の書でもある。その意味で本書はエリウゲナに関する書として現在、文句なしに世界最高のもので、これに比肩すべき書は一書もない。

著者は特に西洋古代からルネサンスに至る西洋哲学の優れた研究者としてつとに世界に知られた学者であるし、ドイツ哲学界では近年、氏に対して Fischer Preis と Reu-chlin Preis が相次いで授与されたこともニュースになっているので、本誌の読者にはいまさら著者について紹介するまでもないだろう。しかし本書の表題である「エリウゲナ」に関する氏の活動に関してのみ若干のコメントを加えることは評者の最低の義務であろう。

著者はかつて国際エリウゲナ協会 (The Society for the Promotion of Eriugenia Studies=SPES) の会長を務めたことがあり、国際エリウゲナ・コロキウム (International Eriugena-Colloquium) を三回主催し (その成果は *Eriugena. Studien zu seinen Quellen*. Heidelberg 1980; *Eriugena Revidivus. Zur Wirkungsgeschichte seines Denkens im Mittelalter und im Übergang zur Neuzeit*. Heidelberg 1987; *Begriff und Metapher. Sprachform des Denkens bei Eriugena*. Heidelberg 1990. に結実した)、現代のエリウゲナ研究を、わけてもその思想面の研究を最も活発にリードしている哲学者である。

本書はエリウゲナ思想の全体像を描出しようと意図して書かれた書ではなく、「優に25年に及ぶ期間」のエリウゲナに関する12編の論文を収めた論文集であって、うち4編は本書において初めて公刊の運びとなったものであり、既刊論文の中には今回かなり手が加えられている論文もある。いずれの論文もエリウゲナ思想研究の領域で先導的役割を果たして来、現在の研究の基準となっているものであるが、ここでは各論文について個別に論評を加える余裕は与えられていない。それぞれ独立のテー

マを扱った論文をまとめた書としての性格上、論文間に必ずしも内容的連関がないと同時に、他面で多少の重複が見られる。本書のどこにも平板な知識の羅列や無駄な文などは一片も見られない。洞察に富んだ、密度の濃い、レベルの高い論述が緻密な文体で明解な論旨を展開している。

現代のエリウゲナ研究の出発点を仮に M. Cappuyns の Jean Scot Érigène, sa vie, son œuvre, sa pensée (1933) に置くとすれば、その時点と現時点との中間点である1960年代の中頃は現代のエリウゲナ研究が飛躍的な展開を開始した時期と見ることができる。すなわち、1960年代半ばから今日に至るまでの約30年間はエリウゲナの著作の批判的校訂版の相次ぐ出版、前述の SPES の設立、国際エリウゲナ・コロキウムの開催、モノグラフィー・論文の増大などに見られるように、エリウゲナ研究はそれ以前の30年間の状況と打って変わって著しい隆盛を見た。T. Gregory (1963年)、M. Cappuyns (1963年上掲書復刊)、H. J. Floss (1967年 Migne, Patrologia Latina 122 復刊)、R. Roques (1967年) などと相俟って、Beierwaltes が最初のエリウゲナ論文 Das Problem des absoluten Selbstbewußtsein bei Johannes Sctotus Eriugena (in: *Philosophisches Jahrbuch* 73; かなり彫琢を加えた上、Absolutes Selbstbewußtsein. Divina ignorantia summa ac vera est sapientia. と改題されて本書に収載) を公刊したのは1965/66年であった。以来今日に至るまで、著者はエリウゲナ思想面の研究を推進してきた第一人者であるがゆえに、著者のエリウゲナ研究の歩みが1960年代中頃からのエリウゲナ研究の飛躍的興隆と展開に重なっているのは当然のことである。

最近約30年間でエリウゲナ研究は多様化しているが、しかし思想の研究領域に限って言えばそこにある程度共通する一つの特徴を認めることができる。そしてその特徴はこの領域の研究を牽引して来た著者の研究姿勢が具現している。それは著者の言葉を借りて一言で表現すれば、「エリウゲナへの接近方法における歴史的・コンテクストの見方と概念的・体系的な研究との意識的な結合」である。この方向性は哲学、神学、文献学、歴史学、言語学などの諸学の関心をエリウゲナの同時代の思想環境のみならず源泉と影響との関係の解明へ向かわしめ、エリウゲナ思想の理解の深化と拡大を押し進め、延いてはエリウゲナ研究全体を活性化する力となってきた。先に挙げた Beierwaltes 主催・編集の国際エリウゲナ・コロキウムの報告論文集はその具体的成果である。

「歴史的・コンテクスト的見方と概念的・体系的研究所との意識的な結合」という著者の研究姿勢の根底には哲学者としての著者独自の「哲学的解釈学」が横たわっているように窺われる。それはまともな形では述べられていないものの、序文や第一章「エリウゲナの魅惑」Eriugenas Faszination に比較的集中的に表れているし、他の諸論文にも散見される。誤解を恐れずに要約を試みれば、それは「見かけだけの客観主義」Scheinobjektivität と極端な主観主義との中間（「アリストテレス的中庸 meson という意味で」）を行く複雑な理解過程に立つもので、「自分自身の思惟つまり自分自身の歴史的文脈を覆い隠したり、排除したり、まったく忘却したりすることなく、テキストの事柄 Sache をそれ自身において方法的に意識してその歴史制約のうちで展開しようとする」ことである。「自分自身のものにおける過去のもの、異他なるものと、他者における自分自身のものとを媒介するそれ自体非常に複雑なそのような形だけが、過去のものの可能的な現前 Gegenwart に光を当て、そのことによって現在の思惟にとってのその過去のもの、異他なるものの意義の大きさを明らかにする」のである。著者にとっては、過去のテキストを読むことは、思惟の「事柄そのものに眼差しを向けることによって歴史から現在化されたもの das Vergewärtigte, つまり思想の現在 Gegenwart」を明るみにもたらすことである。それが可能なのは思想の現在がその原点に対して弁証法的関係に立っているからである。著者にとって「魅惑的」として正当に主張できるのはこういうものだけであり、まさしくエリウゲナとはその意味で「魅惑的」なのである。著者は「哲学者の告白」の章である「エリウゲナの魅惑」で、エリウゲナの「魅惑が実際益々長く続き、益々強まっている」と告白している。エリウゲナ研究はたんに過去への「古本的・博物館的懐古」などではなく、哲学的に正当化できるものであり、エリウゲナの現在化を欲するゆえんはそこにある。例えば、著者はエリウゲナ哲学において「現実性全体ないしは存在全体についての、理性的論証によって跡づけることの可能な概念的な了解と、人間に固有の制約と規定についての人間の自己了解」という現代に通じる哲学そのものの問題を認める。

かくて、著者はエリウゲナを「事柄として有意義な、たぶん思惟の歴史にとって模範的と思われる思想」と見なして、著者は思想源泉に対するエリウゲナの複雑な関係の究明からエリウゲナ哲学の独自性を見だし、その独自性に中世から現代に至る思想の形成と展開（例えばニコラウス・クザヌス（特に論文 Eriugena und

Cusanus), マイスター・エックハルト (特に論文 *Eriugena Redivivus. Vorbemerkungen zu einem Paradigma für Eriugenas Wirkungsgeschichte zwischen Mittelalter und Neuzeit.*), ヘーゲルやシェリングその他のドイツ観念論とエズラ・パウンドとホルヘ・ルイス・ボルヘスの現代文学 (特に論文 *Zur Wirkungsgeschichte Eriugenas im Deutschen Idealismus und danach. Eine kurze, unsystematische Nachlese.*) に対するエリウゲナの決定的な影響の可能性の本質の根拠を探り出す。

著者のエリウゲナ研究にインセンティブを与えているのは特に新プラトン主義思想をはじめとする古代中世の思想ばかりではない (プラトン主義の伝統に関しては "Plato Philosophantium de Mundo Maximus". Zum ‚Platonismus‘ als einer wesentlichen Quelle für Eriugenas Denken, 中世美学に関しては *Negati Affirmatio: Welt als Metapher. Zur Grundlegung einer mittelalterlichen Ästhetik* と *Harmonia*, 新プラトン主義的トリアス概念との関連で *Einheit und Dreiheit. Corollarium de relatione* がある). エリウゲナに関する彼の最初の論文 *Absolutem Selbstbewußtsein* はヘーゲル論理学の「絶対的理念」die absolute Idee に衝き動かされて展開されたものであることは著者が自ら語っている。ヘーゲルは「スコトウス・エリウゲナの論じ方は (独創的というより) 新プラトン派に依存するものですが、作品は哲学的です。プラトン流ないしアリストテレス流の論じ方のうちに、うれしいことに、新しい概念が見出され——それが哲学として見ても正しく深いものなのです。そこではすべてがきちんとでき上がっています。」(長谷川宏訳『ヘーゲル哲学史講義』下巻 p. 6, 河出書房新社1993) と評価した。19世紀のドイツ観念論のエリウゲナに対する「熱中」振りは論文 *Zur Wirkungsgeschichte Eriugenas im Deutschen Idealismus und danach* に詳しい。評者が手許の資料でヘーゲル以後の十九世紀のエリウゲナの思想に関するモノグラフィーに限ってざっと見ただけでもその数は15冊にのぼる。しかしヘーゲル哲学とエリウゲナ哲学との親近性やシェリング哲学とエリウゲナ哲学との関係は残念ながら本書によってもほとんどまだ未解明のままである。もはや紙幅に余裕も無いので、他の論文にも若干言及しておく。Sprache und Sache. Reflexionen zu Eriugenas Einschätzung von Leistung und Funktion der Sprache はエリウゲナにおける言葉の働きに関する比類なく深い考察であり Duplex Theoria は神的次元領域と時空的次元領域とを別々に切り離して観ているのではな

く、両者を二重に観るエリウゲナ独特の見方を論じている。また Pascha—Transitus—Übergang はエリウゲナの詩 *Auribus Aebraicis* のドイツ語訳も付けて、その詩に見られるエリウゲナ思想のキーワードの一つである *transitus* (移行) の思想を論じている。

評者には碩学にもものを言う資格はないが、敢えてエリウゲナの弁証法に関する説明に対して一言注文を呈したい。著者は *resolutiva* をドイツ語で *auflösund* と訳している (S. 69)。これは著者に限らぬことで既に古から見られることである (K. Samstag, *Die Dialektik des Johannes Skottus Eriugena*. Wertheim 1930)。確かに *resolutiva* を直訳すれば *auflösund* ということにもなるかもしれないが、しかし *resolutiva* とは「統合的」とか「総合的」という意味であるのに、*auflösund* はそのような意味を持っておらず、むしろ逆の意味を持つたから、この語は誤解を招くであろう。評者の臆測ではその淵源はヘーゲル (『エンチクロペディー』227補遺参照) ではないかと思っている。

前述の通り、著者の研究はエリウゲナ哲学 (それは彼の神学的意図と内的な相属的關係にある:「真の哲学は真の宗教であり、逆に、真の宗教は真の哲学である」『予定論』I. 1; 5, 16-17) における根本思想の解明の努力であり、彼の哲学の形成に関する歴史的に媒介された問題位相と事柄自体に即した問題の把握とを目指すものであるが、著者のそのようなエリウゲナ研究は本書を持って終了したわけではない。「益々高まる」と告白されたエリウゲナの魅惑は今後著者にどのような思索を促すのか、期待したい。

ついでながら、著者によるエリウゲナに関する論文としては本書収録論文以外にも *Eriugena, Aspekte seiner Philosophie* (in: *Denken des Einen*. Studien zur neuplatonischen Philosophie und ihrer Wirkungsgeschichte. Frankfurt am Main 1985, S. 337-367.) と *Die Wiederentdeckung des Eriugena im Deutschen Idealismus* (in: *Platonismus und Idealismus*. Frankfurt am Main 1972, S. 188-201.) があることを付け加えておく。

---